

「縁・えにし」のよろこび

～親鸞聖人・報恩講 (752回忌)～

昨年(たかはしてつりよう)の11月26日～28日の3日間、ご講師に高橋哲了師(広島・妙蓮寺)をお迎えし、親鸞聖人の御仏事をお勤めいたしました。阿弥陀さまのおこころを明らかにされた宗祖を偲び、浄土真宗の救いのよろこびを頂戴しました。最終日は、雅楽の音色の中に宗祖鑽仰作法(しゅうそさんごうさほう)(音楽法要)のお勤め、荘厳な雰囲気(しゅうそさんごうさほう)に包まれました。

これからも、この『親鸞聖人・報恩講』を門信徒一体となって、大切にお勤めさせていただきます。



講師：高橋 哲了師



～永代経法要～

先般、4月13日～15日に『永代経法要』をお勤めしました。初日が日曜日の夜席(午後7時半)からでしたが、3日間を通して多数のお参りの中、無事にご満座となりました。

講師の松月博宣師(糸島市・海德寺)は、布教使(お説教師)の中でも、全国各地にご出講される大変お忙しい先生です。永代経法要の意義をお示しくださりながら、阿弥陀さまのはかり知れない智慧と慈悲のおはたらきに包まれて、往生浄土のお念仏申す人生を大切さをお取り次ぎくださいました。



講師：松月博宣師



本堂下の第一納骨堂の各基上部の漆塗り替え修復がなされました。また、5月末には床部分のタイル張替作業も予定しています。本堂建設時(昭和51年建立)と同時に第一納骨堂を設けました。大切なご先祖様のご遺骨をご安置し、手を合わせお念仏申す中に、阿弥陀さまのおはたらきに包まれて、亡き方々がこの私の人生の道しるべとなってくださっています。御恩報謝の思いとともに、お参りさせていただきます。



本願寺新報 hongwanji journal

購読料：1部120円(税・送料込)
(年間購読料：4,080円 税・送料込)

毎月3回(1日・10日・20日発行)
毎月8ページ
特集号：お盆号(8月1日号)・新年号(1月1日号)は増頁
[7月10日号・12月10日号は休刊]

購読ご希望の方はお寺まで

那珂川町・松木区の小森信子さんが、本願寺新報読者コーナー(4月20日号)にご紹介されました。

お尋ねできるのが安心



副住職さんの声かけで真教寺仏教婦人会の中に「女性の会」ができました。どなたでも参加自由で、ご法話と懇談会で学びを深め、座談会では、わからないことを聞き語らうことができます。前回学んだことを忘れてしまい、顔が少し赤くなります。でも平気です。

ただ聞くだけでは十分理解できなかったことも、この会が続くことを願っています。(福岡県那珂川町 真教寺・小森信子 88歳)

阿弥陀さまからのお手紙

『親の名のり 南無阿弥陀仏』

広島県・教専寺 福岡 義朝

『仏説無量寿経』というお経の中に、名声という言葉が出てまいります。この名声は名前の名と声と書きます。これは「南無阿弥陀仏」の名号のことですが、阿弥陀仏の換(か)び声、もつと申しますと「私が親なんです」という親の名のりと味(あじ)わえます。

これは、うちのご門徒さんの話です。もう二十年くらい前の話です。そのお家に、私は年に一度、報恩講にお参りさせていただいておりますが、その年お参りいたしますと、三十代のご主人が話されました。妹さんが離婚して帰ってこられたこと。しかし、今は都会で働いておられ、妹さんの四歳になる息子さんを預かっているということ。そして、その四歳の男の子を紹介されました。「友君おいで。ちゃん」とあいさつしなさい。」友君は部屋に入ってきて来て、ちよんんと頭をさげました。そのとき、私はその子を見て、とても暗い表情の子だなと思いました。きつと離婚にあたって家庭もたいへんだったのだろう。この子これから大丈夫かな、とも思ったものでした。

しかし、友君はその家庭で育てられてゆくうちに、だんだん明るくなりました。その家にはおじいさんもおばあさんもいらつしやってかわいがられ、ご主人も奥さんもわが子と同じように分け隔てなく育てられたようでした。それに、この地の保育所に行つていっばいお友達もでき、みんなから「友君、友君」と慕われました。やがて友君は保育園を卒園して小学校へ入学することになりましたが、ちょうどそのときに、お母さんが再婚することになりました。これは、そのお家のおばあさんから聞いた話です。そのお母さんの再婚相手の方にもお子さんがいらつ

しゃって、相手の方はお子さんを連れて来てくださいます。お互いに子どもを連れて一緒に幸せを築きましよう、と言われたそうです。しかし、友君はお母さんといっしょに行きたくないようだったそうです。なぜなら、四歳からこの家での生活がとても楽しくて、お友達もたくさんいるからです。でも小学校入学にあたって区切りはいいし、長い目でみればお母さんと一緒の方がいいだろうとも思われます。結婚式、そして入学式も近づいてきます。さあ友君をどうしようかと、その時期、子ども達が眠った後、台所でおじいさん、おばあさん、ご主人、奥さんの四人で毎晩のように話合(あ)ったそうです。

そんなある夜、大人四人で話し合っていると、階段を降りる足音が聞こえてきました。二階で寝ていた友君が、パジャマ姿で台所の戸を開けて入ってきたのです。とても緊張して、おじいさんやおばあさんの前を通り過ぎて、ご主人、奥さんの前にちよんんと正座して座りました。そして震える声で言ったそうです。「お願いですから、ぼくをここに置いてください」と。するとご主人は言ったそうです。「友君。ここに置いてやってもいいけど、これからわたしがお父さんだよ。わたしのことをお父さんと呼ぶんだよ。すると、友君は大声で言ったそうです。「お父さん」と。ご主人は友君を抱きしめたそうです。家族みんなが泣いたそうです。

さてここで、ご主人の「これからは私がお父さんだよ」というのは、親の名のりということ。これからは学費を出してあげるよ。生活費を出してあげるよ」といって、してあげるよと言うのは他人が言うことです。「私がお父さんだよ」ということは、どういふことでしょうか。それは今のあなたを丸ごとすべて引き受けたということ。『南無阿弥陀仏』も、今の私を丸ごと引き受けたという、親の名のりとなって仕上げられているのです。これは、死んだら浄土に生れさせてあげるとか、救ってあげるとい

う、してあげるといふことではありません。今の私そのまま引き受けたというのが親の名のりであり、それを名声と言います。そして、それは私の口から出てきてくださる「南無阿弥陀仏」です。このわずか六字の「南無阿弥陀仏」。しかし、ここには計り知れない如来さまのお徳が込められています。私は、学生時代、毎月、父から現金封筒でお金を送ってもらっていました。現金封筒なので、中には現金とともに手紙が入っていました。そこには勉強しなさいとか、風邪を引くなよとか、交通事故に気をつけよ、と毎月だいたい同じことが書かれてありました。でも今になって思えば、しみじみと有り難かつたなと思うところがあります。それは手紙の最後にさりげなく書かれてある三文字です。「父より」。この三文字です。これは世界に無数の人がいても、この「父より」と名のれるのはたった一人だけです。その「父より」とは、私が生まれてこの方ずっと育て上げた言葉にならない万感の思いが凝縮して、この三文字に込められています。それは勉強できなくても引き受けたということであり、風邪を引いたら一番心配するのは父であり、万が一事故に遭ったら真っ先にかけるのが父です。「南無阿弥陀仏」もわずか六字ですが、そこには無始以来、私を案じてくださった計り知れない如来さまのおこころが、お徳となってこめられているのです。

※この法話を書かれた福岡義朝師は、来年の報恩講2015年11月26(土)28(日)のご講師です。

『しみほとけとともに』第4巻(2008年3月発行)より

